

びわこ文化公園植物だより〔β 版〕

シャガ アヤメ科

学名 *Iris japonica*

・古い帰化植物、園内に自然繁殖



シャガ

ゴールデンウィーク頃、シャガの花が見頃になります。丈夫すぎていくらでも増えるためでしょうか、あまり珍重されませんが、見れば見るほど凝ったデザインの、とてもおしゃれな花です。

シャガは山林に生えるので野生種のように感じられますが、実際は中国南部原産の植物で、日本には古い時代に誰かが持ち込んだと考えられています。野生ではないとされる理由は、種子がまったくできないからです。この事情はヒガンバナによく似ています。シャガもヒガンバナも3倍体といって細胞の染色体の数が異状であるため、一見正常に成長して花を咲かせても、花粉や胚珠(種子のもと)を正常につくることができないのです(種なしスイカは人為的につくられた3倍体)。そして、シャガもヒガンバナも、中国に行くと、正常に種子ができるものがあることが知られています。正常な種子をつける個体があるところが、本来の原産地というわけです。日本のシャガは種子をつくらないかわり、地下で細いムチのような地下茎を伸ばして子株をつくり、群生します。

シャガの学名には、”*japonica*”(日本の)という言葉がついています。江戸時代末期に日本を訪れたスウェーデンの植物学者チュンベリーによって、日本の植物として名前がつけられてしまいました。原産地の中国の方々からすれば、納得いかないことかもしれませ

ん。でも、昔はこういうことがよくあったのです。いったん発表されてしまった学名は、意味的におかしいとわかって修正することができないのが国際ルールです。日本が誇る園芸植物のサツキに”*indicum*” (インドの) という学名がついていることなどを例に示して、がまんしてもらうしかありません。

シャガという名前もいわくつきです。漢字の「射干」という植物名がもとになっているといわれていますが、中国の「射干」は、日本でヒオウギと呼ばれる、別の植物なのです。葉っぱだけだとよく似ているので、混同されてしまったようです。シャガのほうは中国語では「胡蝶花」といいます。



ヒオウギ(中国の「射干」)の花



シャガの花を上からみたところ

シャガの花を上から見ると、6枚の花びらのうち3枚だけに、はちみつをこぼしたようなもようがあります。フレンチ料理で白いお皿の上にわざと垂らしたソースみたいではありませんか？ これは「蜜標」といって、昆虫に蜜のありかを教える目印です。この黄色のもようをたどっていった先に本当の蜜があります。この花びらの配色は、別の記事でご紹介したムラサキサギゴケやトキワハゼにそっくりです。どうやら、同じ目的のために、同じデザインにたどりついたようです。



シャガの花、上から見るか？横から見るか？

シャガの花を見かけたら、上から見るだけでなく、ぜひしゃがんで横から見てあげてください。アヤメのなかまであることがよくわかります。デザインの凝りようといったら、アヤメ以上です。花の中心部にさらに3枚、先が繊細に分かれた、小さめの花びらのようなものがありますが、これはめしべの先についた飾りです。

🌸 シャガは [ここ](#) で見ることができます。

(龍谷大学農学部・三浦励一)